

アオダイショウ (学名: *Elaphe climacophora*)

【ナミヘビ科ナメラ属】



▲ アオダイショウの幼蛇



◀ ニホンマムシの幼蛇



▲ アオダイショウは瞳孔が丸くおだやかな印象を受ける



▲ ニホンマムシの目は瞳孔が縦長で鋭い印象がある

人間がヘビを嫌う理由の一つに毒を持つことが挙げられます。しかし実際には、只見町に生息する8種のヘビのうち、毒を有するのはニホンマムシとヤマカガシのみです。ニホンマムシの背面には特徴的な銭形模様と呼ばれる斑紋(写真右上)があります。これを見ると多くの方が嫌な感じがするのではないのでしょうか。では、左の写真のヘビはどうでしょうか？ この写真のヘビは、毒を持たないアオダイショウの幼蛇です。アオダイショウの幼蛇は、毒蛇であるニホンマムシに似た模様を持つことで、捕食者からの攻撃を回避しているという説があります。

アオダイショウは、北海道から本州、四国、九州に分布します。成長すると全長2メートルにもなり、上記の模様はなくなります。木登りが上手く、家屋に住みつくこともあり屋根裏のネズミ類などを食べることからかつては益獣とされていました。只見町では、9月頃、道路上でアオダイショウの幼蛇がしばしば目撃されます。アオダイショウは、6～9月に産卵し、孵化に2カ月ほどかかるので幼蛇はこの頃に出現しはじめるためと考えられます。一瞬どきりとしませんが、手を出さなければ噛まれることはありません。アオダイショウとニホンマムシの幼蛇は、一見よく似ていますが、写真のように目の瞳孔の違いがありますし、ニホンマムシの頭部はエラが張っていて三角形であり、アオダイショウはそうでないことで区別できます。

猪又かじ子写真教室「十島・塩沢集落で夏の只見を撮る！」開催！

8月4日、雪食地形とモザイク植生の山並みが広がる十島・塩沢集落周辺を舞台に、ブナセンター主催の写真教室が開催されました。講師の猪又かじ子氏は柏市在住で、只見にアトリエを構えて長年にわたり四季の自然を撮り続けてこられた方です。猪又氏は季節や撮影場所の状況が伝わるような構図の取り方や背景の選び方などを中心に指導をしてくださいました。写真教室を通じ、只見の自然環境や生活文化を新たな視点で発見し、理解する良い機会となりました。



▲ 試行錯誤しながら写真を撮る参加者

※この広報紙は再生紙を使用しています



※環境にやさしい大豆油インキを使用しています